

# 長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書

## — 総括篇 —



2013

岩手県奥州市教育委員会

# 長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書

## — 総 括 篇 —

表紙写真 撮影日 2010年10月2日 撮影 (株) 菊池技研コンサルタント (岩手県大船渡市)  
裏表紙写真 撮影日 2011年10月14日 撮影 (株) 菊池技研コンサルタント (岩手県大船渡市)

## 序

「とりわきて 心も凍みて 泗えぞわたる 衣河見に 来たる今日しも」と、西行法師にも詠まれた歌枕「衣川」に接するようにして、礎石が顔を覗かせ、その周りを土手のよう

に土の高まりが廻っているところがあります。そこが長者ヶ原廃寺跡です。

長者ヶ原廃寺跡は、江戸時代に仙台藩が編纂した地誌『奥羽観蹟聞老志』によって、その存在が広く知られるようになりました。そこでは、『義経記』で源義経を藤原秀衡に引き合せた人物として登場する「金売り吉次」の屋敷跡だと紹介されています。

長者ヶ原廃寺跡において初めて調査が実施されたのは昭和 28 年で、その成果によって遺跡の重要性が改めて確認され、昭和 32 年には岩手県指定史跡となっております。その後も調査が進められ、遺跡の内容がより明らかになったことを受けて、平成 17 年には史跡「柳之御所・平泉遺跡群」の一部として、国史跡に指定されております。

これにより、遺跡を国民共有の財産として恒久的な保存管理を行うための指針として『長者ヶ原廃寺跡保存管理計画書』を平成 18 年に、適切に保存しながら広く公開すべく整備を実施するための基本方針として『長者ヶ原廃寺跡整備基本計画』を平成 21 年に、それぞれ策定しております。また、地権者の皆様のご理解とご協力を賜りながら、礎石建物跡周囲の水田を公有化するとともに、さらに発掘調査を重ねてまいりました。

この 60 年間で 15 回に及んだ調査により、長者ヶ原廃寺跡は今からおよそ 1000 年前、藤原清衡が平泉に中尊寺を建立する約 100 年前、清衡の母方の祖、安倍氏が建立した寺院であることが明らかになりました。また、区画施設が築地塀であることも明らかになつたことで、安倍氏だけの私寺ではなく、公共的な側面も持っていた可能性も高まってまいりました。さらに、中心建物は当時の東北地方では最大規模を誇っていたようです。

こうした調査の成果を総合的にまとめた本書が広く活用され、古代末期、日本列島の佛教史・建築史、そして何より衣川周辺の地域史が明らかになる一助になれば幸いです。

終わりに、発掘調査や本書の作成に当たり、ご協力をいただいた地権者や地域住民の方々と、ご指導・ご助言を賜りました文化庁、岩手県教育委員会、平泉遺跡群調査整備指導委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成 25 年 3 月

奥州市教育委員会

教育長 佐藤 孝守

## 例 言

1 本書は、長者ヶ原廃寺跡（岩手県奥州市衣川区田中西 59-1 ほか）の調査成果報告書である。内容は長者ヶ原廃寺跡において過去に行われた調査を対象とし、その成果を総合的に叙述することを目的とした。

2 本書の作成にかかる経費は、国庫補助事業の対象としている。

3 調査の実施及び本書の作成にあたっては、平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導・助言を受けた。委員会の構成は次の通りである。

委員長 ~平成 22 年度 河原純之 (川村学園女子大学教授)

平成 23 年度～ 田辺征夫 (奈良県立大学特任教授)

委 員 入間田宣夫 (東北芸術工科大学教授) 岡田茂弘 (国立歴史民俗博物館名誉教授)

牛川善幸 (京都橘女子大学教授 ~平成 18 年度) 遠藤セツ子 (メビウスの会)

小野正敏 (人間文化研究機構理事) 故工藤雅樹 (福島大学名誉教授 ~平成 20 年度)

斎藤利男 (弘前大学教授) 坂井秀弥 (奈良大学教授) 佐藤信 (東京大学教授)

清水真一 (徳島文理大学教授) 清水擴 (東京工芸大学名誉教授)

関宮治良 (古都ひらいづみガイドの会) 田中哲雄 (前東北芸術工科大学教授)

玉井哲雄 (国立歴史民俗博物館教授) 西村幸夫 (東京大学教授)

※所属などは本報告書刊行時点のもの

4 長者ヶ原廃寺跡の発掘調査主体は複数に渡っている。次数ごとに示せば、次の通りとなる。

第 1 次 岩手県教育委員会 第 2 ・ 6 ・ 8 次 衣川村教育委員会

第 3 ・ 5 ・ 7 次 岩手県立博物館 第 9 ~ 14 次 奥州市総合政策部

各年度の調査成果については、報告書や現地説明会等において公表されている。本書は、特に奥州市及び奥州市教育委員会（旧衣川村教育委員会）が実施した分（上記右段）をまとめたもので、これらと本報告書の記載内容が異なる場合は、本報告書がこれらに優先する。なお、岩手県教育委員会と岩手県立博物館が発行した報告書（上記左段）とはその限りではない。

5 本書の刊行にかかる一連の業務は、以下の体制で実施された。

刊行主体 奥州市教育委員会

事務局 奥州市教育委員会事務局世界遺産登録推進室

教育長 佐藤 孝守 室長補佐 佐藤 善一 主任 岩渕 梨恵

教育部長 大沼 一裕 主査 高橋 広和 文化財専門員 石崎 高臣

室長 菊池 敏彦 主任学芸員 及川 真紀

6 本書の原稿執筆・編集・校正は石崎が担当した。

7 第 2 次調査以降の調査で得られた資料は、奥州市教育委員会が保管している（岩手県立博物館実施分は除く）。

## 目 次

I 位置と環境 ······	1	4 遺物 ······	46
1 位置と地理的環境 ······	1	IV 遺構と遺物の検討 ······	52
2 歴史的環境 ······	3	1 建物群の性格 ······	52
II 調査に至る経緯 ······	9	2 建物と築地壝の配置 ······	52
1 江戸時代の地誌等にみえる 長者ヶ原廃寺跡 ······	9	3 遺構の検討 ······	52
2 発掘調査の経過 ······	10	4 遺物の検討 ······	57
3 遺構名称の整理 ······	15	V 考察 ······	58
III 調査成果 ······	16	1 寺院の建立者 ······	58
1 概要 ······	16	2 寺院の性格 ······	58
2 基本土層 ······	16	3 廃絶後の長者ヶ原廃寺跡 ······	59
3 遺構 ······	17	VI 総括 ······	60
		報告書抄録 ······	61

## 図版目次

第1図 遺跡の位置(1) ······	1	第21図 S F 04(1) ······	37
第2図 遺跡の位置(2) ······	2	第22図 S F 04(2) ······	38
第3図 周辺の遺跡・伝承地の位置 ······	5	第23図 S F 04(3) ······	39
第4図 遺跡の範囲 ······	8	第24図 S D 12 ······	42
第5図 調査区の配置 ······	12	第25図 S X 01 ······	43
第6図 遺構配置図 ······	13	第26図 土師器① ······	48
第7図 遺構名称と位置概念図 ······	15	第27図 土師器② ······	49
第8図 基本土層柱状図及び検出地点位置 ······	16	第28図 その他の土器 ······	50
第9図 S B 01(1) ······	17	第29図 土製品 ······	50
第10図 S B 01(2) ······	19	第30図 石製品 ······	51
第11図 S B 01(3) ······	23	第31図 鉄製品 ······	51
第12図 S B 02(1) ······	25	第32図 建物配置概念図 ······	52
第13図 S B 02(2) ······	26	第33図 11世紀の陸奥国の寺院建築 規模比較概念図 ······	53
第14図 S B 03 ······	28	第34図 S B 01 柱間寸法概念図 ······	54
第15図 S F 01(1) ······	30	第35図 S B 02 柱間寸法概念図 ······	54
第16図 S F 01(2) ······	31	第36図 国見山廃寺跡で検出されている 方3間堂 ······	55
第17図 S F 01(3) ······	32	第37図 S B 03 柱間寸法概念図 ······	55
第18図 S F 02(1) ······	33		
第19図 S F 02(2) ······	35		
第20図 S F 03 ······	36		

## 写真図版目次

写真1 遺跡遠景(1) ······	6	写真32 S F 02 トレンチ⑨完掘 ······	35
写真2 遺跡遠景(2) ······	7	写真33 S F 02 トレンチ⑫完掘 ······	35
写真3 遺跡近景 ······	7	写真34 S F 03 トレンチ⑬完掘 ······	36
写真4 S B 01 周辺現況 ······	17	写真35 S F 03 トレンチ⑮完掘 ······	36
写真5 S B 01 調査状況(1) ······	17	写真36 S F 04 トレンチ⑯完掘(1) ······	37
写真6 S B 01 調査状況(2) ······	22	写真37 S F 04 トレンチ⑯完掘(2) ······	37
写真7 S B 01 南辺基壇外装検出状況 ······	22	写真38 S F 04 トレンチ⑯断面 ······	38
写真8 S B 01 東辺基壇外装検出状況 ······	22	写真39 S F 04 トレンチ⑯完掘 ······	39
写真9 S B 01 東辺張出部検出状況 ······	22	写真40 S F 04 トレンチ⑰完掘(1) ······	39
写真10 S B 01 磁石検出状況(1) ······	22	写真41 S F 04 トレンチ⑰完掘(2) ······	39
写真11 S B 01 磁石検出状況(2) ······	22	写真42 S F 04 トレンチ⑯完掘 ······	39
写真12 S K 05 断面 ······	22	写真43 S D 04 と S F 04 の位置関係 ······	41
写真13 S B 01 磁石 d vi 設置状況 ······	22	写真44 S D 04 トレンチ⑯完掘 ······	41
写真14 S B 01 南東部完掘 ······	23	写真45 S D 06 完掘 ······	42
写真15 S B 01 東辺基壇外装断面 ······	23	写真46 S D 05 完掘 ······	42
写真16 S B 02 周辺現況 ······	25	写真47 S D 12 トレンチ⑯完掘 ······	42
写真17 S B 02 完掘 ······	27	写真48 S K 01 断面 ······	42
写真18 S B 02 磁石 b iv 検出状況 ······	27	写真49 S X 01 検出状況 ······	44
写真19 S B 02 基壇外装検出状況 ······	27	写真50 S X 01 完掘 ······	44
写真20 S B 02 剥片状石片検出状況 ······	27	写真51 S X 01 断面 ······	44
写真21 S B 02 基壇断面 ······	27	写真52 S X 01 断面 ······	44
写真22 S B 02 磁石 x 7 現況 ······	27	写真53 S X 01 遺物出土状況(1) ······	44
写真23 S B 03 完掘 ······	29	写真54 S X 01 遺物出土状況(2) ······	44
写真24 S B 03 基壇断面 ······	29	写真55 遺物包含層断面 ······	45
写真25 S F 04 現況 ······	29	写真56 ピット群検出状況 ······	45
写真26 S F 01 トレンチ①完掘 ······	31	写真57 出土土師器(1) ······	50
写真27 S F 01 トレンチ③完掘 ······	31	写真58 出土土師器(2) ······	50
写真28 S F 01 トレンチ④完掘(1) ······	33	写真59 S F 01 断面 ······	55
写真29 S F 01 トレンチ④完掘(2) ······	33	写真60 S F 04 断面 ······	55
写真30 S F 01 トレンチ⑤完掘 ······	33	写真61 S F 02 の補修痕跡 ······	56
写真31 S F 01 トレンチ⑥完掘 ······	33		

## 表 目 次

第1表 新旧遺構名称対応表 ······	15	第7表 遺構未検出トレンチ一覧 ······	45
第2表 基本土層新旧対応表 ······	17	第8表 土師器一覧 ······	46
第3表 磁石上面の標高一覧 ······	20	第9表 土製品一覧 ······	50
第4表 堀跡規模一覧 ······	40	第10表 石製品一覧 ······	51
第5表 溝跡一覧 ······	41	第11表 鉄製品一覧 ······	51
第6表 土坑一覧 ······	41		

## I 位置と環境

### 1 位置と地理的環境

#### (1) 遺跡の位置と現況

長者ヶ原廃寺跡は、平成18年2月20日に水沢市・江刺市・前沢町・胆沢町・衣川村が合併して誕生した奥州市の南西隅に所在する。奥州市は、岩手県内陸南部に位置し、北は北上市・西和賀町・金ヶ崎町・花巻市、南は一関市・平泉町、東は遠野市・住田町、西は秋田県境に接している。

遺跡（以下、単に遺跡とある場合は特に断らない限り長者ヶ原廃寺跡を指す）は、旧衣川村すなわち奥州市衣川区を西から東へ蛇行しながら流れる衣川の左岸に位置し、周囲は一筆30a程に区画された水田が広がっている。ただし、かつて岩手県指定史跡だった範囲は区画整理が実施されていないため、小区画の水田がそのまま残されている。遺跡の周辺の水田の所々には住宅地が見られ、一部は当地方ではイグネと呼ばれる屋敷森を形成しているものもある。遺跡の標高は34m前後だが、すぐ西を流れる衣川の水面はそれより15m程低く、遺跡の西側は急な崖となっている。

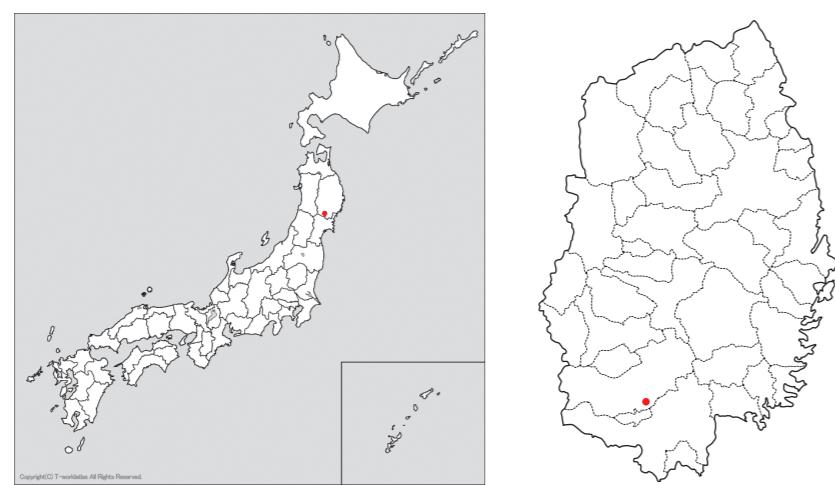
遺跡内部は水田として利用されており、耕作のために農道が取り付けられている。

#### (2) 地形

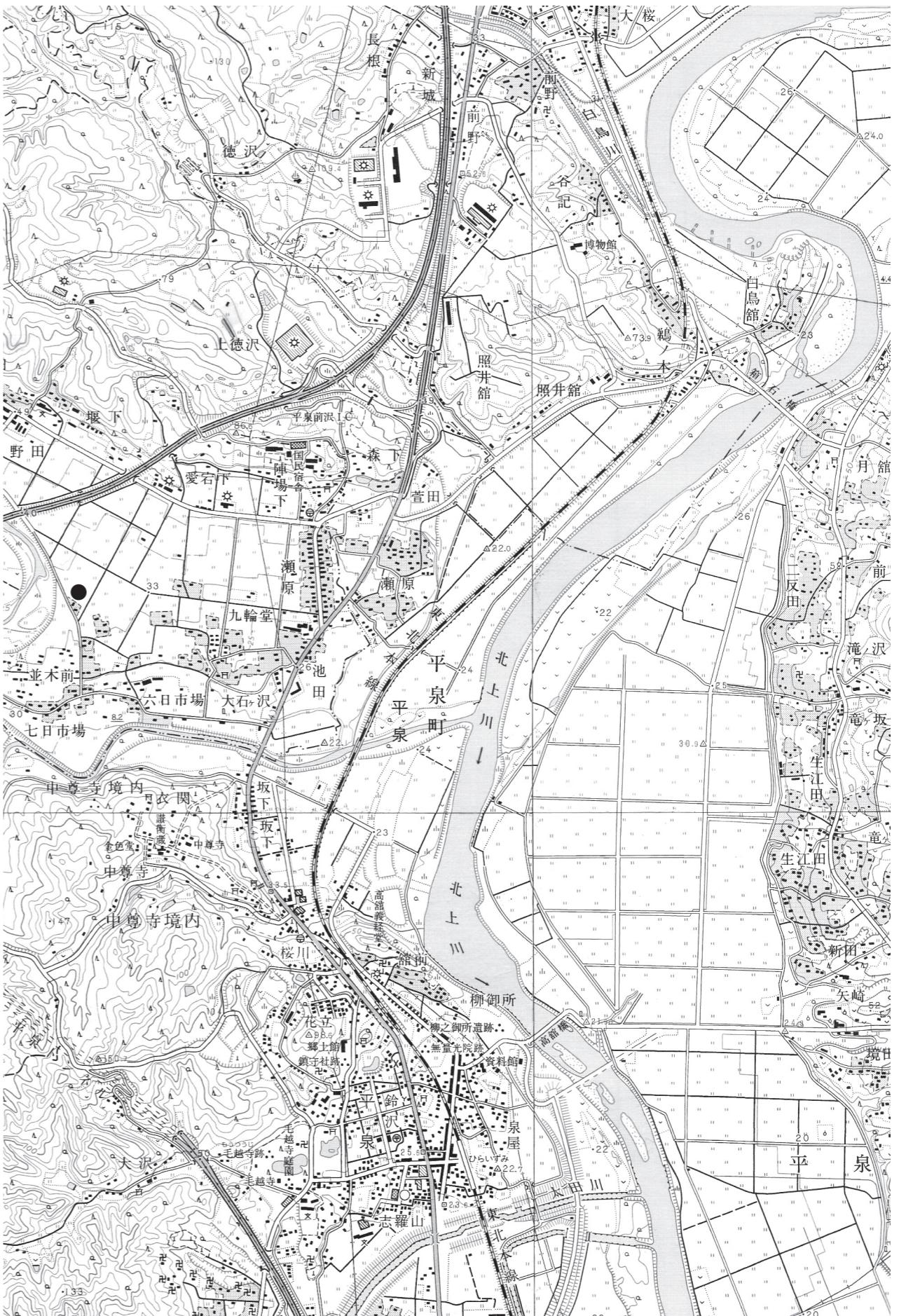
奥州市衣川区は一部に北上低地を含むが、区域の多くは奥羽山脈東側の山地が占めている。一水系であり、北股川と南股川が合流して衣川となり、おおむね西から東に蛇行しながら流れ、遺跡から約2kmの地点で北上川と合流する。

遺跡は、焼石岳（1,548m）、駒ヶ岳（1,130m）をはじめとする焼石連峰に源を発する胆沢川が流路を北方に遷移させながら形成した胆沢扇状地の南側に立地する。この扇状地は高位面から一首坂、胆沢（さらに上野原・横道・堀切・福原の各段丘に細分される）、水沢の各段丘に区分され、北東端（水沢段丘）には胆沢城跡が所在する。遺跡の北にある一首坂段丘は、奥州市胆沢区小山から北上川西岸に至る東西20km前後の尾根状の丘陵で、南側は衣川、北側が白鳥川・徳沢川によって開析されている。

北股川、南股川、衣川のそれぞれの流域の谷間には狭長な衣川台地が形成され、細かい数段の段丘面が確認されている。衣川区は西部の上衣川地区と東部の下衣川地区に分かれるが、遺跡のある下衣川は衣川と北上川の河岸低地が最も発達している地域である。遺跡は、北の一首坂段丘から衣川に向かって緩やかな傾斜面に立地している。伽藍の造営にあたっては建物及びその周辺部分は整地しているものの、伽藍区域全体を水平に整地することなく、逆に傾斜を活かしているようである。



第1図 遺跡の位置(1)



## 2 歴史的環境

### (1) 交通の要衝地としての衣川

現在でも遺跡の1km内外に国道4号・JR東北本線・東北縦貫自動車道が南北に走っていることからも窺えるように、遺跡の周辺は交通の要衝地となっている。

こうした状況は古代から続いていたようだ。これを証するように遺跡の北東には古代東山道の駅家のひとつである白鳥駅の遺跡地である白鳥地区があることから、すぐ近くを東山道が走っていたことは間違いない。また、藤原清衡が中尊寺を中心にして北は外が浜、南は白河関まで整備した、後の奥大道にあたる幹線道路も直近を通っていたと考えられる。さらに、東北地方太平洋側を南北に貫流する北上川とそこに合流する衣川とが流れていることから、陸上交通と水上交通の結節点だったことは容易に予想され、事実、『吾妻鏡』には遺跡の周辺が「産業はまた海陸を兼ねる」場であることが述べられている（文治5年9月27日甲申条）。このような地域的特性から、遺跡周辺には古代律令国家の「蝦夷征討」の際の軍事拠点「衣川營」が設置されている（『続日本紀』延暦8年6月庚辰条）。

### (2) 古代・中世初期の衣川

延暦21年（802）、遺跡より北方20kmの地点に胆沢城が造営されると、胆沢・江刺・和賀・稗貫・志波・岩手の6つの郡が順次設置されていった（奥六郡）。鎮守府が多賀城から胆沢城に移されると、これらの郡は鎮守府の直轄領となり、多賀城におかれた陸奥国府から独立志向を強めていく。この奥六郡とそれ以南とを画していたのが衣川で、そのための施設として、位置は不明ながら衣川関が遺跡の周辺に設置される。

10世紀になると、平泉藤原氏の母方の祖となる安倍氏がおそらく鎮守府の在庁官人として勢力を蓄え、各地に柵とよばれる政治的・軍事的拠点を設置しながら、奥六郡を支配下に組み込んでいった。遺跡のすぐ東には瀬原という地名があり、瀬原柵の遺跡地と考えられる。また、『吾妻鏡』には衣川地区には安倍氏一族の屋敷が軒を連ねていたと記されており（文治5年9月27日甲申条）、安倍氏が交通の要衝地である遺跡周辺に進出していたことを窺わせる。

安倍氏は、前九年合戦において源頼義・義家を中心とする朝廷軍に破れ滅亡する（『陸奥誌』）。その後、奥六郡は清原氏によって支配されるが、清原氏も後三年合戦で滅亡すると、安倍氏の血を受けた平泉藤原氏が東北地方を支配するようになった。

平泉藤原氏が東北地方を支配していた12世紀においては、初代清衡が居館を平泉の地においてることもあって、政治・行政上の拠点や寺院など多くの施設は平泉に造営されていた。しかし、三代秀衡の岳父である藤原基成の居館が衣川の地に作られ（衣河館）、源頼朝に追われた源義経が身を寄せるなど、衣川の地の重要性は低下することはなかったと推測される。これを裏付けるように、衣川堤防建設にともなう緊急発掘調査では、これまで想定されていなかった大規模な遺跡群が発見された。なかでも接待館遺跡では大規模な堀と土塁が検出され、堀跡からは大量のかわらけが出土し、柳之御所遺跡に匹敵する重要な施設だったことが判明し、現地保存され、柳之御所・平泉遺跡群として国史跡に指定された。

このように、衣川の地は古代末期から中世初期にかけて日本史上の重要な舞台となっている。また、長者ヶ原廃寺跡は、平泉文化がいかにして成立したかを明らかにする上でも重要な遺跡といえる。

### (3) 長者ヶ原廃寺跡周辺の遺跡・伝承地

遺跡が所在する奥州市衣川区には、11～12世紀代の遺跡や安倍氏・平泉藤原氏に関する伝承地が多く、特に下衣川地区に集中している。ここではそのうち主なものを取り上げる。

#### 瀬原I・II遺跡（1・2）

遺跡の北東約1.7kmに位置する古代・中世・近世の複合遺跡である。竪穴建物や掘立柱建物などからなる10世紀前半～中頃の集落が確認されており、うち1軒の竪穴建物の床面から土器埋設遺構が検出され、ほぼ完形の灰釉陶器長頸壺（大原2号窯式）が出土している。また、いわゆる「平泉セット」と呼ばれる手づくねかわらけ・白磁四耳壺・渥美産陶器が出土していることが注意される。

#### 衣の関道遺跡（3）

遺跡の南約850mに位置する。掘立柱建物や池状遺構・テラス状遺構から構成される古代・中世の複合遺跡である。特別大きな建物は検出されていないが、池状遺構は12世紀の州浜を持つものである。

#### 九輪塔遺跡（4）

遺跡の東約1kmに位置する。未調査だが、当地には藤原清衡が母方の祖父安倍頼時の菩提を弔うために九輪塔を建立したとの伝承が残されている。なお、同地の字名は「九輪堂」である。

#### 接待館遺跡（5）

遺跡の南約650mに位置する。掘立柱建物や溝・堀跡などから構成される古代・中世の複合遺跡である。特に幅約9.0m、深さ約2.0mの堀が現状でコ字状に巡っており、その内部に多数の掘立柱建物があり、また幅約2.8m、深さ約1.0mの堀が同じようにコ字状に巡っている。堀跡からは12世紀代の多数のかわらけが廃棄された状態で出土しており、遺跡で何らかの儀式・儀礼が行われていたことを示唆している。

#### 六日市場遺跡（6）

遺跡の南東約1kmに位置する。掘立柱建物や溝跡から構成される中世と近世の複合遺跡である。12世紀代の3間×2間の四面庇掘立柱建物と同時期の溝が2条検出されている。特に2条の溝の東側には遺構は存在しないことから、この溝は衣川の北岸に展開する遺跡群の東端を画するものと推測されている。

#### 室の樹遺跡（9）

遺跡の南東約500mに位置する。巨岩が点在しており、かつては衣川の氾濫によって移動してきたものだと考えられていたが、岩手県立博物館の調査によれば、長者ヶ原廃寺跡・本堂跡の礎石と同じ石材であり、かつての産地は北上川を挟んだ対岸の東稻山北麓だという。このことから、室の樹遺跡は長者ヶ原廃寺跡の礎石の加工場だったか、あるいはここにかつて礎石建物が存在したものと推測される。室の樹遺跡の東隣の住民の記憶によれば、かつてこの付近から瓦が出土したことから、ここに何らかの施設が存在していたことはほぼ間違いないだろう。なお、この遺跡の名称は、かつて藤原秀衡の母が仁和寺（御室御所とも呼ばれる）より庭木をここに移し庭園を造営したため、この地を「室の樹」と呼ぶようになったとの伝承に因んでいる。

#### 北館遺跡（10）

遺跡の西約900m、衣川右岸に位置する。東北縦貫自動車道の建設工事に伴う緊急発掘調査で確認された。縄文時代（中期）・古代・近世の複合遺跡である。古代に関しては9世紀後半に位置づけられる土器が出土した竪穴建物が1棟検出されている。ただし、遺構外だが10世紀後半のものと考えられる土器も出土しているのが注意される。

#### 小松柵遺跡（11）

遺跡の南西約800mに位置し、江戸時代中期の仙台藩の地誌である『奥羽觀蹟聞老志』は、安倍氏が設置した柵のひとつで、頼時の兄弟である僧・良昭の「居館」とされる小松柵はこの地に存したとしている。岩手県立博物館による試掘調査が行われているが、安倍氏の時代11世紀代の遺物などは確認されていない。